

発行
北海道ポーランド文化協会
〒001-0032
札幌市北区北 32 条
西 5 丁目 2-32-902
佐光方
電話・FAX
011-790-8610

POLE

第 79 号 2013. 8. 1
北海道ポーランド文化協会会誌

北海道ポーランド
文化協会
創立25周年!

Happy 25th Anniversary!

第67回例会



第15代Kitara専属オルガニスト
カチョルさん

～オルガンとソプラノでつづるスラブ音楽～



マリア・マグダレナ・カチョル
オルガンリサイタル with 松井亜樹

2013年8月16日(金)

開演14時(開場13時30分)

北海道大学クラーク会館講堂(北8西7)

※入場整理券(無料/自由席)・フライヤーを同封しています。



ポーランド文化を研究している縁で、カチョルさんが札幌に来てからとても親しくさせていただきました。Kitara のカフェで彼女の音楽話に耳を傾けるうちに、彼女がポーランドだけでなくロシアも含めスラブのオルガン曲、ピアノ曲にとっても造詣が深いことを知りました。ぜひ札幌でスラブ音楽を紹介する機会をもちたいと思い、北海道大学パイプオルガン研究会、日本アレンスキー協会と北海道ポーランド文化協会の共催の演奏会として実現することができました。

カチョルさんのオルガンを初めて聴いたときからぜひ共演していただきたいと思っていた声楽家の松井亜樹さんにも出演を快諾していただき、素晴らしいプログラムになりました。ラフマニノフやショパンの有名曲のオルガン編曲版、グラズノフ、スジンスキなどのスラブの作曲家のオルガン曲、アレンスキーとモニューシュコの歌曲など、聴きどころに溢れています。北海道大学クラーク会館のオルガンとカチョルさんの共演も見逃せません。みなさまのご来場を心よりお待ちしております。(佐光 伸一)

日本の印象



マリア・マグダレナ・カチョル

日本の地で私の音楽的冒険が始まってからもう10カ月が過ぎました。札幌に来るまでは、これほど多くの素晴らしい体験やコンサートが私を待ち受けているとは思っていませんでした。日々の生活について私が思い描いていた想像も、実際に私が出会った現実とはかけ離れたものでした。私は今ははっきりと確信してこう言うことができます、「これは私の人生で最も美しい瞬間である」と。

最初の日々

私が初めてコンサートホール Kitara のステージの敷居をまたいだ瞬間、私はこのあまりにも美しい空間にこれから何度も出演することになるとは信じられませんでした。日本に来る数週間前に眺めた写真は、このホールのスケールを十分に伝えてはいませんでした。ステージの高さからバルコニーを見上げたとき、私は聴衆の要求にこたえ

るために、私に課せられた責任がいかに大きいかを初めて実感しました。しかしまたそれはとてもモチベーションの高まる瞬間でもあり、私はこの瞬間を決して忘れないでしょう。

最初に若い聴衆と出会ったことは私にとって大きな喜びでした。9月の終わりに小学校の生徒のためのコンサートが企画され、プログラムにオルガンと管弦楽の曲が含まれていたのです。

この経験のおかげで、2012年10月6日に予定されていた私のデビューリサイタルの準備ははるかに容易になりました。デビューリサイタルのプログラムには興味深い作品がたくさん含まれていましたが、中でも最大のものにはフランツ・リストの作品でした。聴衆は私をとっても暖かく迎えてくれました。演奏中、あり得ないほど強いエネルギーを感じ、それがまるで私と聴衆を結ぶ架け橋のように感じました。このような感覚を体験したことはこれまで一度もありません。日本の観客がどれほど素晴らしく、本当に音楽を愛しているかが分かりました。リストの素晴らしいコラール「アド・ノス、アド・サンタレム・ウンダム」の最後の和音が響き渡ったとき、何の障害もなくコンサートの全曲目を演奏し終えた幸せで涙が頬を流れました。一言付け加えれば、ヨーロッパでは、オルガンのコンサートは60分から65分を超えることは決してありません。日本でのリサイタルは100分以上で、身体的にもかなりの努力を必要とします。

オーケストラとともに

オーケストラとの音楽を通しての出会いも、どれもが得難い体験でした。子供のためのコンサートのほかにも、サン・サーンスの交響曲、チャイコフスキーのマンフレッド交響曲、マスカーニ、アンダーソン、エルガーなどの作品もオーケストラとともに演奏しました。指揮者の山下一史さん、尾高忠明さん、高関健さんとの仕事は、素晴らしい貴重な経験で、大きな満足感をもたらしてくれました。大木秀一さんとの共演も素晴らしいものでした。彼の指揮のもと、私たちのコンサートの10日ほど前にコンクールで全日本の頂点に立った合唱団とクリスマスコンサートで共演したのです。

日本での最初の数カ月、Kitaraの館長の依頼で、私はポーランドの音楽とポーランドのオルガンに関する講演を準備しました。フランス語の通訳の助けで、2つの小学校で生徒のために講演し、曲の一部も演奏しました。またピアニストとオルガニストのためにJ.S.バッハの「平均律クラヴィーア曲集」に関するワークショップも2013年1月に行いました。自分の音楽のルーツであるピアノに戻ることができて、とても幸せな気持ちになりました。

初めてのCD

2013年の前半を飾ったのは、私のプロとして初めてのCDの録音でした。Kitaraのホールでアルフレッド・ケルン社のオルガンを使って行いました。共同作業と努力の結果、とても良い録音になり、収録した曲では豊かな音色と多様なスタイルを示せたと思います。選曲は決して容易ではありませんでしたが、すでに発売された今では、録音された1音1音すべてが私の喜びです。ここにはバロック、ロマン派、現代音楽、ドイツ、ポーランド、フランス音楽、オルガン用のオリジナル曲、即興曲、ピアノ曲を私が編曲したものなどが含まれています。好みにうるさい音楽マニアの方でも、きっとお気に入りの曲が見つかると思います。

各地でのコンサート

4月からは仕事のテンポが速くなりました。北海道だけでなく日本全国でのコンサートの数が増えます多くなったのです。5月と7月には東京の2つの最も素晴らしいコンサートホールに出演するという素晴らしい機会があり、また大森めぐみ教会でバッハのリサイタルを行うこともできました。



東京芸術劇場とサントリーホール＝写真上＝は、世界中の高名な演奏家を招待しています。そこはとりわけオルガニストのための場所でもあります。両ホールには素晴らしいオルガンがあるからです。東京芸術劇場のオルガンは、フランスのガルニエ社製で、構造がとてもユニークです。ルネサンス、

バロックそしてより現代的な響きという 3 つのスタイルを独立して兼ね備えています。他のオルガンと違って、クラシックケースとモダンケースという 2 つのオルガンケースがあり、特殊な仕組みで軸によって回転します。

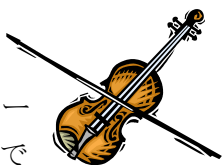
サントリーホールオルガン“Rieger”はとても興味深く、響きの素晴らしい楽器です。私が利用して非常に便利だったのは、2番目の移動可能な演奏台で、ステージ上の好きなところに置くことができ、コンサートの間、聴衆と直接コンタクトを取ることができます。“Rieger”社はオーストリアの会社で、1845 年以来オルガン製作を専門に行っています。

東京の大森めぐみ教会での、日本でヨーロッパのメーカーにより最初に製作されたオルガンによるコンサートと 7 月の Kitara のバースデーコンサートでは、J.S. バッハの作品のみを演奏する機会に恵まれ、感動的なひと時でした。バッハは 10 年前から限りなく崇拜してきた作曲家なので、彼の作品だけに捧げられたコンサートの思い出は永遠に私の心に刻まれました。

バイオリンとの共演

札幌交響楽団のコンサートミストレスでバイオリニストの大平まゆみさんとの室内楽のコンサートも、本当に素晴らしい出来事でした。素晴らしい曲なのに日本ではあまり知られていない作品を聴くために、約 1300 人のお客様が来場してくださいました。バッハ、アルビノーニ、モリコーニの作品、私の編曲によるブラームスのハンガリー舞曲集第 5 番、サラサーテの「アンダルシア・ロマンス」を演奏しました。この日のために、私は A. ヴィヴァルディの「四季」から〈夏〉を編曲しました。さらにマスネの「タイス」の瞑想曲、モンティの「チャルダッシュ」も演奏しました。この日聴衆から受けた喝采は、私の人生ではこれまで決してないほど大きなものでした。

札幌のみなさまにまったく知られていない作品を演奏できるなら、もう一度このステージに出演したいと願っています。オルガンの音色を巡る私の



冒険はようやく始まったばかりだとの思いを強くもっています。ピアニストとしての勉強、そして長年にわたる室内楽での実践による経験のおかげで、私は他のオルガニストが気づかなかったかもしれない、オルガンの知られていない一面を表現することができるようになったのです。

旭川のリードオルガン

旭川豊岡教会にゲスト出演したときにも、同じような感覚を味わいました。この教会でのコンサートでは、オルガン音楽だけでなく、リードオルガンのオリジナル曲の作曲法にも耳を澄ませさせていただきました。旭川にあるこの楽器はアメリカで 1890 年に製作され、15 年後に他の 2 台の楽器と一緒に日本に運ばれましたが、現在まで保存されているのはこの 1 台のみです。リードオルガンのあまりにも美しい響きは、この「ハーモニウム」でのレパートリーに今後も取り組もうという靈感を吹き込んでくれました。

この楽器の製作と作曲家たちのこの楽器に対する関心の高まりは 19 世紀中ごろから 20 世紀中ごろまでに姿を消しました。今日では、リードオルガンのための素晴らしい作品の評価する機会もありますが、その価値は他の楽器の作品に劣るものではありません。むしろ、S. カルケ=エレルト、A. ギルマン、C. フランク、H. ベルリオーズ、L. ヴィエルヌなどの作品で、多くの音楽家がこの楽器で自らの最高の技術を示しています。

日本滞在の最後の一月は、これから待ち受けている演奏会のおかげで、喜びと感情に満ち溢れています。ソロのコンサートがふたつと室内楽のコンサートがひとつあります。

北大でのコンサート

8 月 16 日の北海道大学でのコンサートではソプラノの松井亜樹さんと、ポーランド音楽とロシア音楽を演奏するという嬉しい機会を得ました。

東欧の音楽はいつも私の心の最も近くにあります。ピアノの勉強をしていたときには、F. ショパン、I. J. パデレフスキ、W. ルトスワフスキ、E. パウラシュ、J. ザレンプスキ、K. シマノフスキなどのポーランド

の作曲家や、S.ラフマニノフ、S.プロコフィエフ、P.チャイコフスキー、M.ムソルグスキー、D.ショスタコーヴィチなどロシアの作曲家の多くの作品を演奏しました。数年前からは、私が興味をもったポーランドとロシアのあまり知られていないオルガン曲を演奏しています。ミェチスワフ・スジンスキとフェリクス・ノヴォヴィエイスキの作品は、和声と構成の観点からきわめて興味深いものです。スラヴのメロディーの響きのおかげで、聴衆は初めて聴く響きに夢中になります。

ロシアのオルガン音楽は、正教会で楽器が用いられなかったため、ポーランドと同じレベルにはありませんが、グラズノフなどの巨匠が残した数少ないオルガンの小品は、聴くに値する興味深

いものです。今回のプログラムではラフマニノフのプレリュードの中から、オルガン用に編曲された素晴らしい作品を演奏します。

フェアウェルコンサート

私の最後のフェアウェルコンサートは、2013年8月24日に札幌コンサートホールで開かれます。日本のアーティスト藤原貴子さん、谷野健太郎さんを迎えて、P.コシュローのオルガンと2台のパーカッションのための作品、ベートーヴェンの交響曲第5番の最終楽章を私が編曲したものなど、サプライズに溢れたコンサートになっています。

この最後に残された2つのコンサートで北海道ポーランド文化協会、日本アレンスキー協会のみなさまとお会いできるのを心より楽しみにしています。

(佐光伸一 訳)

北大クラーク会館の パイプオルガンについて

北海道大学パイプオルガン研究会
会長 金多景 (キム・ダギョン)



カチオルさんと金多景さん。クラーク会館のパイプオルガンの前で。

北海道大学クラーク会館講堂には、北海道で2番目に設置されたパイプオルガンがあります。

パイプ本数が1556本、ストップ数が24個であり、

現在も道内では有数の規模を誇る楽器です。特に、国立総合大学でパイプオルガンを所有しているのは珍しいです。

北大にパイプオルガンが設置されたのは、約50年前のことです。北大の創基80周年のとき、学生のための福利厚生施設(現・クラーク会館)が設立されました。当時、卒業生等に募金を呼びかけた結果、北大創基80周年記念会館建設期成会からの寄贈という形でクラーク会館へのパイプオルガンの設置が実現されました。ドイツ・ボンのヨハネス・クライス社によって3年余かけて製造されたこのオルガンは、1962年、ハンブルク港から小樽港への船旅を経て、北大に到着し、1966年5月末に組

立と整音が完了しました。

このパイプオルガンを用いて、大学主催で内外の著名なオルガニストを招いた演奏会や、学生向けの特別講義(全学教育科目「パイプオルガンとその音楽」)などが行われており、普段接する機会の少ないパイプオルガンという楽器により親しみを感じていただくきっかけとなっています。

1990年代初め、一時中断されていた大学主催の定期演奏会が再開されるなど、北大のオルガンをより活用しようという声が起こり、それをきっかけに北海道大学パイプオルガン研究会が1994年5月に設立されました。現在、研究会ではクラシック音楽はもちろん、その他のジャンルの曲も演奏することによって、パイプオルガンという楽器のさまざまな魅力を引き出そうとしています。また、公認学生団体として定期演奏会を春と秋、年に2回主催しています。

今回、Kitara 専属オルガニストのカチオルさんのリサイタルがクラーク会館で行われることとなり、多くの方々に北大のオルガンの音色を披露できますことを、大変嬉しく思っています。パイプオルガンがより親しみのある楽器になることを期待しています。



第67回 例会報告



第15代 Kitara
専属オルガニスト

～オルガンとソプラノでつづるスラブ音楽～

マリア・マグダレナ・カチョル オルガンリサイタル



with 松井亜樹

2013年8月16日に北海道大学クラーク会館講堂で、本会と北海道大学パイプオルガン研究会、日本アレンスキー協会が協力して、札幌コンサートホール Kitara 第15代専属オルガニスト、マリア・マグダレナ・カチョルさん(ポーランド出身)と声楽家の松井亜樹さん(札幌大谷大学短期大学部)を迎えて、講演と演奏会「オルガンとソプラノでつづるスラブ音楽」を催し、400人近くの聴衆がすばらしい演奏と50年近い歴史をもつクラーク会館パイプオルガンの美しい響きを堪能しました。

マリア・マグダレナ・カチョルさんの音楽

日本アレンスキー協会会長 川染 雅嗣

8月17日に函館本線は脱線事故が起こり不通になった。その惨状をテレビで観て戦慄した。もし私の札幌行が一日遅れていたら、カチョルさんの演奏を一生聴かなかったかもしれない。そう思うと、偶然とはいえそこには見えない力が働いているに違いないと思わざるを得ない。

8月13日に函館入りした私は、キャンプディレクターを務めているイカール国際ミュージックキャンプで子供たちに室内楽を指導し、16日の朝の特急で札幌に移動した。函館のキャンプは今年で3回目だが、こんなに湿っぽく暑い函館は初めてであった。札幌も似たような気候で、東京とさほど変わらないくらいである。会場のクラーク会館まで歩いて行く間に、汗だくになってしまった。

クラーク会館にはいささか思い出がある。札幌北高に通っていた私は、昼休みに自転車を飛ばしてクラーク会館まで行き、ご飯を食べて午後の授業に間に合うように帰ってくるというバカな遊びに熱中していたときがある。何度か試したがかなりの強行軍である。その時の思い出として残っているのは、クラーク会館の料理がひどく不味かったということくらいである。ましてやそこにパイプオルガンがあることは、今回の企画で初めて知ったくらいである。

当日会場は多くの聴衆で埋め尽くされ、正直札幌の音楽ファンの見識の高さに驚いた。普段日本アレンスキー協会のイベントでの観客動員に苦労していることを思うと、一体どんな人たちが聴きにきたのかと不思議な気持ちになった。

この日の会は前半が講演、後半が演奏である。やがて長身のポーランド美女が登場した。彼女がその日の主演のマリア・マグダレナ・カチョルさんである。

ポーランドのオルガン音楽についての説明がひとしき



り終ると、演奏に入った。バッハのトッカータとフーガニ短調で始まった演奏は、様々な時代の作品を網羅した大変興味深いものであった。カチョルさんの演奏はまさしく正統的なもので、無駄な虚飾を一切排除した、極めて簡潔かつ充分な彼女そのものでもいべき清廉なものだった。大向こうの受けを狙った軽佻浮薄な演奏が蔓延する現代にあって、彼女の音楽は貴重な存在である。

終演後はカチョルさんを囲んで食事会があり、共催団体の代表として私も出席させていただいた。それのみならず、10年ほど使っていなかったポーランド語で乾杯のご挨拶までさせて貰い、その錆びついたポーランド語に我ながら愕然としたものである。話題は多方面に及び、しばらくぶりでの知的な時間を過ごすことができた。Kitaraのオルガニストの任期は1年ということだが、それはいかにも短いと言わざるを得ない。日本での生活に慣れたころには交代である。今回最も心残りなのは、彼女の演奏を一度もKitaraで聴いたことがないことである。ポーランドに帰国してからも度々日本を訪れ、演奏して欲しい。その時は是非共Kitaraで聴いてみたいものである。



食事会風景。筆者（左端）とカチヨルさん（右から2人目）

最後に余談だが、ショパンは少年時代に、ワルシャワの教会でオルガン弾いていたと伝えられている。ショパンのあの徹底したレガート奏法とそれを支える複雑な指使いは、実はこのオルガン演奏の体験から生まれたものではないとも言われる。真偽のほどは確かではないが、十分に考えられることである。



終了後の交流会風景。筆者（後列右から4人目）、カチヨルさん（同6人目）、フルート・立花雅和さん（前列左から1人目）、ソプラノ・松井亜樹さん（同2人目）、全面的にサポートした佐光事務局長（同3人目）

そんなことをふと思い出した。

カチヨルさんの益々の活躍を切に祈念し、この文章を締めくくりたい。
(かわそめ・まさし)

ポーランドにおけるオルガン音楽

お話 マリア・マグダレナ・カチヨル

ポーランド音楽の歴史

ポーランドは、966年にキリスト教を国教として以来、今日までローマ教会の影響下にあり、音楽の分野でも西ヨーロッパ文化の影響は多大でした。ポーランドの中世の音楽作品は、16～17世紀に頻発したモルドヴァ、ロシア、スウェーデンなどとの戦争や軍事衝突の中で大部分が失われました。

現存の最古のオルガンとリュートのタブラチュア譜（五線譜だけでなくアルファベットなどを利用した記譜システム）から、ポーランドで活躍した作曲家が優秀な技術を持ち、ヨーロッパ音楽の影響下にあったことがわかります。その中にはクラクフのミコワイ、シャモトゥウィのヴァツワフ、少し後代のアダム・ヤジェンプスキ、マルチン・ミェルチェフスキ（別名ミコワイ・ジエレンスキ）などがいます。15世紀半ばから、楽器や楽譜などを収集し利用する修道院付属機関のおかげで音楽は著しく発展しました。その後ワルシャワでは、1625年に初めてオペラが制作され、1766年にはポーランド最初の劇場が創立されました。

音楽の発展に寄与し世界的に名を残した優れた音楽家としては、モーツァルトが「アンダンテ」K.470を捧げたことでも知られるクラクフのヴァヴェル城大聖堂のバイオリン奏者フェリックス・ヤニエヴィチ、ワルシャワ音楽院を設立しフレデリック・ショパンの最初の師でもあったユゼフ・エルスネル、『音楽週報』誌を発行した作曲家カロール・クルピンスキ、政治家であり音楽家でありポーランド国歌の作曲者に擬せられた

ミハウ・クレオファス・オギンスキや、ポーランド・オペラの創始者スタニスワフ・モニューシユコ、独立回復後のポーランドで首相と外務大臣を務めた作曲家イグナツィ・ヤン・パデレフスキ（ニューヨークのメトロポリタン歌劇場で初めて上演されたポーランド・オペラの作者）などが挙げられます。ポーランド民謡の魅力を作品の中で利用した作曲家には、カロール・シマノフスキやフェリクス・ノヴォヴィエイスキがいます。20世紀後半のポーランド音楽は、ヴィトルト・ルトスワフスキ、クシシュトフ・ペンデレツキ、ヘンリク・グレッツキなど世界的に有名な作曲家の強い影響の下にあり、彼らも作品でポーランド民謡を何度も利用しています。

ポーランドのオルガン

ポーランドに存在したオルガンに関する最初の記述はカジミェシュ2世の治世（1177-94）にさかのぼり、彼の宮廷には小さなパイプオルガンがあったそうです。中世には、修道院での儀式のために小さなオルガンが製作されました。たとえばサンドミェシュのドミニコ会のオルガンや、チシェブニツァのシトー会には1200年ごろにはオルガンがあったといわれます。それらの楽器は何度も修理され、それについて多くの情報が集められていて、そこから14世紀以降のオルガン製作者の名を知ることができますが、初期のオルガンは大きな損傷を受け修復されていることが多く、普通は残っている古い楽器のいろいろな痕跡は入念に消し去られています。



15 世紀には、トルン、クラクフ、グダンスク、ヴィリニェス、リュボフなどの大都市には、いくつかの大きなオルガンや、多くの小さなオルガンがあり、それらの都市の経済力を物語っています。残された文書から、オルガンを 2 つもつ聖マリア教会があるクラクフのような都市がいくつもあったことがわかります。ポーランドでもっとも有名なオルガン製作家としてはスタニスワフ・ゼルニク、ミコワイ・ザウェンツキが挙げられます。後者はドイツのフレイブルグの大聖堂をはじめ、ポーランド国外でもオルガンを製作しました。

17 世紀以前の大オルガンは、当時の資料や作品によれば、手鍵盤 2 つとペダル 1 つをそなえ、いわゆるポジティブや 1 つの鍵盤につながったパイプが、現代のように楽器の内部にあるのではなく、聖歌隊席の手すりに吊り下げられていたことが特徴です。裕福な家庭では、「ポジティブ」や「レガール」と呼ばれた、ペダルがなく手鍵盤が 1 つ、音色を変えるためのストップが 1 つ、あるいは数個しかない小さなオルガンが人気がありました。

17 世紀には、ドイツで教育を受けたポーランド人によってオルガン製作工房が発達しました。イェンジェユフやオルクシュでは、彼らの製作したオルガンの完成度の高さに驚かされます。その音色はしばしば後代の影響により変えられています。オルクシュのオルガンは 1612 年製で、ヤン・フンメルが製作したもっとも古い楽器の一つです。オルガンケースはルネサンス様式で、元の状態では 23 のストップと、手鍵盤 2 つとペダルがあり、現在はストップ数は 29 です。

よく知られた価値の高い歴史遺産的オルガンとしては、1620 年にカジミェシュ・ドールヌイで作られた素晴らしい楽器があります。製作予算の不足のためか、トランペットのようないわゆるリード管の音がないという興味深い音色の特徴があります。オルガンボックスはオリジナルのまま、ポーランドと西ヨーロッパで発達した素晴らしい手工業の業がみられます。

ニトロフスキー族の名は、17 世紀のオルガン製作の歴史の中で、もっとも重要でしょう。この時期の現存するもっとも美しいオルガンは、ニトロフスキ家三代のオルガン製作者の手によるものです。特に重要なのはサンドミェシュのコレギウム教会のオルガンで、製作には 1694-98 年まで 4 年かかり、当時のヨーロッパでは最大のおよそ 40 のストップがあります。マッテゾンやアードルングなどのすぐれた音楽理論家も著書でこの楽器に触れています。フロムボルクや



ペルプリンの大聖堂にあるオルガンも、ニトロフスキの残した傑作です。レジャイスクの大聖堂にも、製作に 13 年かかった素晴らしいオルガンがあります。みごとな装飾の施されたバロック様式のオルガンボックスは、ポーランドでもっとも美しいものの一つです。



先にも述べたように、素晴らしいオルガンは、資金の豊富な修道院付属の教会で製作されました。イェンジェユフのシトー会の教会にもそうした素晴らしい例があります。全ヨーロッパでよく知られたオルガン製作者カスパーリーニ家は、プロツワフとプウォツクに素晴らしい楽器をいくつか残しています。有名な、グダンスクのオリヴァのオルガンは、1763-88 年にヤン・ブルフ・オルネットが製作した、現存する中でもっとも大きく繊細な楽器の一つですが、その音色は新しい流行に合わせて何度も変えられています。

中央ヨーロッパの西側に残る楽器の調査から、当時ポーランドで作られたオルガンの様式は、他の国のオルガン製作の強い影響下にあるといえます。オルガンのストップに製作者一族の名がつけられていること以外、ポーランドに固有の特徴は一つもありません。同時期にドイツ、オランダ、フランスで作られたオルガンと比べて、ポーランドのオルガンの大きさは規範から大きく外れません。ポーランドのオルガンは大部分が中程度の大きさで、ストップ数はおよそ 35 ですが、西ヨーロッパでは、オルガンのサイズはもっと大きく、演奏を簡単にするメカニズムやリード管のストップがあります。多くの場合、それはオルガンの注文主の財政力によります。裕福な貴族の家庭では、手鍵盤が 1 つの小さなオルガンが用いられました。同種の楽器が、以前は小さな教会でも使われ、祝日の大きな儀式では「ポジティブオルガン」が用いられました。この種のオルガンで、現存するもっとも美しい楽器はスタールィ・ソソチの大聖堂にあります。

ロマン派の時代には、オルガンの構造や音色に多くの変化がありました。再び武力衝突によって多くの工房が失われ、オルガンは国外の会社で製作されることが多くなりました。その例としては、ウォルカー、ラデガスト、ザウアーや、ポズナンの大聖堂に素晴らしいオルガンを納めたフランスのカヴァイエ・コル社などがあります。残念ながら、このオルガンは第二次世界大戦中に爆撃で完全に破壊されました。

1945 年以降、共産主義体制の下で多くの教会が閉鎖され、オルガン製作は制限され、オルガン音楽の発展は阻害されました。

(佐光伸一 訳)